

- 176 2002年（H14） 12・31 猪木ボンバイエ 埼玉アリーナ大会  
サップ対高山 吉田対佐竹 ミルコ対藤田
- 177 2003年（H15） 1・4 新日ドーム大会  
永田対バーネット

- 178 2003年（H15） 2 新日 両国大会  
NWF戦 高山対柳澤  
西村対カレーマン

カレーマンとはふざけた名前だ。こういうお笑いが新日に出るとは、なんてカタイこという人も最近には少ないだろうな。しかしストロングスタイルだ、とか言っていた頃だってメキシコのおかまコンビとかマクガイヤー兄弟とか、どう見てもお笑いでしかないキャラも登場していた。あまり書かれていないが猪木対ウィリーが行われた日に最後の試合はおかまコンビ対ヤマハブラザーズだったはず。興奮の極値の極真のみなさんもさぞ毒を抜かれたことだろう。

で、お笑いカレーマンと“無我”西村の異次元対決。だいたい異次元対決ほど意外に試合ペースがマッチするもの。西村の“座禅”とか、カレーマンの“ヘッドシザー”からの脱出“などが披露された。

しかし、まあ長州が仕切っていたころならやっぱりやらなかつただろうな。それともカレーマン対佐々木健介でもやったか。

NWFは柳澤に問題ありで、高山には気の毒なマッチメイクだった。

179 2003年(H15) 5・2 新日ドーム大会  
小橋対蝶野 アルティメット戦

小橋対蝶野や新日版VTマッチについては様々なところに出ているのでここでは触れないでおこう。

千里眼が評価したいのはプログラム上、VTマッチと小橋対蝶野に挟まれたところで行われた、村上一成対エンセン井上戦である。

VTマッチでやってもいい組み合わせがなぜか通常のプロレスルールで行われたのだが、千里眼およびその相棒は直に「これは短時間の喧嘩マッチになる」と予想し全くそのとうりになった。

つまりこの試合の役割はVTマッチから速やかに会場の雰囲気のプロレス会場のそれに戻すことであり、村上の流血顔がビジョンに大映しになり会場からどよめきが起こった瞬間に使命は達成されたわけだ。

まあ本来なら新日レスラーにこういう役割を担ってほしいところだ。

180 2003年(H15) 5・5 DEEP後樂園大会  
ドス・ジュニアのVT戦

いい大人が連休になんて見てんだか、という感じの格闘色物ショー。直前に見た新日の「アルティメット・クラッシュ」とは比較にならない。その中で掃き溜めの鶴とでもいうべき存在がドス・カラス・ジュニア。しかし本国でスター街道を歩まずに、なぜアジアの島国であんなことやっているのか、何か公にできない事情があるのだろうか。

翌日の東スポには「マスカラス一族、VTに挑戦！」とかいうヨタ記事が出ていた。マスカラス対ヒクソン。まあファンタジーな組み合わせではある。レスルワンでやればいいんじゃない？

181 2003年(H15) 5 ガイア横浜大会  
ガイアボーイズ 長与 広田対尾崎 KAORU

ガイアボーイズなるものがこの日のお目当て。別に変な趣味じゃなくて、史上初

とも言える女子プロレスラーが育てた男子プロレスラーとはいかなるものか、興味が沸いたわけだが、まあ結果としてそれほどおもしろいものでも興味深いものでもなかった。そのうちどこかの団体に誰かは顔出すだろう。現在ではもうガイアマットからこのプランは消滅したようだ。息が短い。

意外なひろいものは「敗者髪きりデスマッチ」だった。ラダーマッチプラス御笑いマッチは実によく練られた良質のもの。最後まで飽きさせなかったのはみごと。しかも一応若手の部類にはいる広田さくらは試合中、大技の類は無し。いまだきめずらしい。

いわゆる全女マッチでもなくJWP系の美少女プロレスでもない長与ワールドとでもいうものが確立されているんだろう。サイコロジープロレスは“名人芸”の域に入ったか。

182 2003年(H15年)7月6日 ZERO-ONE 両国国技館大会

橋本真也 武藤敬司

小川直也 川田利明

○130決定戦

ガファリ プレデター ダバダ 嵐(ゼットン乱入)

アレクサンダー大塚 藤原嘉明 Kカシン 坂田亘 小島聡 荒川真

盛りだくさんな両国大会であった。いちいち全部書いていたらきりが無い。ここにきてその盛りだくさんなことが橋本流になってきたんだろう。WAR時代の天龍も主催する興行はひたすらに「盛りだくさんなちゃんこ鍋」風なものであった。

橋本の場合は顔ぶれがにぎやかなだけではなく、“でぶ”がやたらと出てくる、というのが天龍とのちがいか。どっちが相撲出身だかわからなくなってくる。

ということで今回の目玉のひとつが“でぶ”ばかりのバトルロイヤル。試合前の控え室での女性レポーターからのインタビューシーンで早くもレポーターに襲いかかるものが続出。あれは多分今後のテレ東のプロレス中継の売りになるだろう。テレ東、八塩アナの退社が残念だ。幸い涼しい日の興行だったので暑苦しさは少なかったが、笑いは充分だった。

意外にも橋本プロレスには御笑いの要素も多く含まれてきたようである。

メインはさすがに御笑いなしの激闘。千里眼が驚いたのは、川田と小川のからみ。当然これは三沢対小川のタッグ戦との比較が予想できたわけだが、千里眼としては川田に軍配をあげたい。なにせ川田と小川はそれぞれのスタイルをぶつけあいながら、ちゃんと全日風な攻防戦を繰り広げていたのである。お互いの技もよけることなく、

しかしダメージは確実に観客にも伝わる。川田は対抗戦形式で光るタイプと言われてきたが改めてそれを証明した感がある。

石橋陵さまが物悲しく歌うZERO-ONEの唄はなんだったんだろう。「すりー、つー、わん、ぜろ、わーん」この繰り返しが耳に残るなあ。